

Translateral Orbital Wall Approach to the Orbit and Cavernous Sinus : Anatomic Study

松尾, 諭

<https://hdl.handle.net/2324/1785364>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)



(別紙様式2)

氏 名	松尾 諭				
論 文 名	Translateral Orbital Wall Approach to the Orbit and Cavernous Sinus: Anatomic Study				
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	園田 康平	
	副 査	九州大学	教授	中川 尚志	
	副 査	九州大学	教授	神野 尚三	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

主論文内容の要旨：

眼窩内病変や海綿静脈洞病変に対する手術アプローチはこれまでよく検討されてきたが、眼窩と海綿静脈洞の両方を巻き込む病変に対するアプローチは、今日においても困難である。本研究では7側のホルマリン固定後の成人屍体標本（眼窩および海綿静脈洞）を手術顕微鏡と内視鏡を用いて解剖し、眼窩と海綿静脈洞の顕微鏡的および内視鏡的微小解剖とorbitozygomaticアプローチとtranslateral orbital wallアプローチの手術解剖を提示した。orbitozygomaticアプローチでは眼窩上および外側面、視神経管、上眼窩裂、海綿静脈洞を露出でき、この領域の手術操作に十分な術野を確保できた。translateral orbital wallアプローチでは眼窩外側壁、視神経管と上眼窩裂さらに、海綿静脈洞の外側壁まで露出することが可能であった。しかしながら眼窩尖部やその周囲の海綿静脈洞への術野は狭く深いものであった。内視鏡補助下では術野を広く観察することができ、とりわけ前床突起周囲や下顎神経後方の露出が可能になると思われた。内視鏡補助下translateral orbital wallアプローチは眼窩および海綿静脈洞に到達可能であり、全切除不能例あるいは眼窩および海綿静脈洞の外側に限局した比較的小さな病変に対してはorbitozygomaticアプローチの代替になりうると考えられた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。